

看護教育における救急車見学乗車の学習内容の検討

— 演習後レポートの内容分析から —

石野 レイ子*¹ 二重作 清子*²

*1 広島県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

*2 広島県立保健福祉短期大学看護学科

2000年9月30日受付

2001年2月13日受理

抄 録

救急医療における看護の認識を深めることを目的として、救急車見学乗車と救急救命士によるデモンストレーションの演習を試みた。38名の学生が提出したレポートから、本演習における学生の学びの内容を分析した。その結果、学習内容として、【装備資器材の特異性・利便性】【装備資器材の種類】【利用者への安全・安楽の配慮】【搬送器具・搬送方法の特異性】【救急救命士への認識】【救急医療への認識】【学習への意欲】【医療施設との連携】【車内環境の安全管理】【親密感】【救急救命士の法的規制】【イメージとの隔たり】の категорияが抽出された。本演習の成果として、医療施設に搬送されるまでの救急救命活動の実際と救急看護の認識を深め、学習の動機づけになったことが伺えた。

キーワード：看護教育，救急看護，救急医療，救急車見学乗車，救急救命士

はじめに

医学や医療技術の進歩にあわせて救急医療体制の整備が進められるなか、プレホスピタルケアの必要性が強調されている。

本学の看護学科では、救急看護の選択科目が開講され、「身近に行なわれる応急処置や病院における基礎的な救命処置を取り上げ演習を行う」とガイダンスしている。看護の臨地実習は医療施設内の実習であることから、患者が病院に搬送されるまでの一般市民や救急隊員や医師・看護婦との協力・連携を学習する機会がない状況である。本科目に関する昨年度開講時の調査では、91%の学生が「授業概要を見て」科目を選択していることや演習の必要性が明らかになった¹⁾。本年度の授業では、プレホスピタルケアとして地域の第一線機関である消防署と救急救命士の協力要請に快諾が得られ、救急車見学乗車と救急救命士によるデモンストレーションの演習を試みることができた。演習後のレポートから筆者らが意図していた以上の学生の学びが読み取れ、教育効果があるように思われた。そこで、学生が提出したレポートの内容を分析し、演習による学習成果として救急医療と看護の認識など、学習内容について検討したので報告する。

方 法

1. 対象

本学3年生で看護学特論Ⅱを選択して、演習当日出席レポートを提出した38名で、そのうち男子学生が3名、年齢は20歳から27歳までの平均年齢20.2歳の学生である。

2. 演習の概要

1) 演習の位置付け

15時間1単位の授業内容は、救急看護の基礎的な知識、技術および態度を習得することを目的として「救急医療・救急医学の歴史の変遷を概観し、地域における救急医療の実態を理解して、身近に行なわれる応急処置や病院における基本的な救命処置の演習を行う」としている。演習前の3回の授業で救急医療の概念や歴史の変遷、救急医療における看護の役割と実際、患者・家族心理への対応について学習し、4回目の演習では、救急車に見学を目的として乗車し（以後、救急車見学乗車と称する）、救急救命に必要な装備資器材や医療機関との情報通信装置など、救急車内環境の特異性と救急救命士による応急処置について理解し、5回目に本学所在地域の救急医療体制の実際や救急救命士の活動の実際を理解することを目的とした。演習後の2回の授業で医療施設における基本的な救命処置を学

び、演習の学習内容を発展的に学習できるような授業内容を計画した。

2) 演習の実際

今回は4回目の演習について分析・検討した。本学体育館横で救急車駐車スペースを設定して、救急車見学乗車、搬送方法の実際、応急処置・資器材の応用技術の展開、の3グループに分かれて、救急車内の救急用資器材や医療機関との情報通信装置などの説明と、搬送や応急処置のデモンストレーションによる演習を実施した。当日の救急業務班として稼働している救急車と救急隊員が、本学で待機している状態での演習であるから、予測されたことではあるが演習半ばで救急車出動要請の無線連絡が入り、無線連絡による交信場面や本学から救急車が出動する実際を見学することができた。出動して搬送を終えた救急車が再度来学して全員が演習することができた。

3. 分析方法

演習後のレポートは、「本日救急車見学乗車や説明を受けた結果、どんなことが学習できましたか。看護の視点から学習内容を述べてください」というA4用紙1枚のレポートで翌日までに提出させた。学生が記述したレポートを分析資料として精読し、記述全部を文脈とし、分析単位をセンテンスに定めた。資器材の名称を簡条書きしたものは1センテンスとして、表現、意味内容の類似性に基づき分類・命名し、カテゴリーを抽出した。

結 果

38名の学生が記述したセンテンスの総数は、173個であった。記述内容を上記の手順で分析した結果、12個のカテゴリーが抽出され、なかでも、【装備資器材の特異性・利便性】の記述件数が最も多く、次いで【装備資器材の種類】【利用者への安全・安楽の配慮】であつ

表1. カテゴリー名および記述件数 (%)

カテゴリー名	記述件数
1. 装備資器材の特異性・利便性	41 (23.7)
2. 装備資器材の種類	21 (12.1)
3. 利用者への安全・安楽の配慮	21 (12.1)
4. 搬送器具・搬送方法の特異性	16 (9.2)
5. 救急救命士への認識	16 (9.2)
6. 救急医療への認識	13 (7.5)
7. 学習への意欲	12 (6.9)
8. 医療施設との連携	9 (5.2)
9. 車内環境の安全管理	7 (4)
10. 親密感	7 (4)
11. 救急救命士の法的規制	5 (2.9)
12. イメージとの隔たり	5 (2.9)

表2. カテゴリーと具体的記述例

カテゴリー	具体的記述例
<p>装備資器材の特異性・利便性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・車内は救命士が使いやすいように便利に工夫されていた ・蘇生用, 外傷用など分けて整理され救急に対応できるような工夫がされている ・患者監視装置があつて状態を監視続けることができるようになっていた ・すごい設備だと思った ・狭い空間に必要な最小限の器機類が上手く収められていた ・吸引圧が低い救急車内でチューブを曲げたり細くして使用の工夫がされていた ・装備や物品が使いやすいように配置してある ・救急車内部は手早く機器の用意ができる ・ラリンジアルマスクは気管内挿管ができない代わりの気道確保ができる
<p>装備資器材の種類</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな器械がある ・種々の医療装置が有ることが分かった ・救急車装備の機器や使い方が分かった ・救急車内の構造, 患者監視装置, パルスオキシメータ, 心電図, 自動心マッサージ器, 血圧計, 除細器, 100ボルトのコンセントなど実際に観て何が有るかわかった ・バッテリー式の吸引器 ・外傷セット ・蘇生セット ・輸液セット ・喉頭鏡 ・吸引器
<p>利用者への安全・安楽の配慮</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・苦痛を最小限にするような配慮がされていた ・足側からの搬送, 搬送中の落下防止の重要性 ・必ず3名乗車して二人が蘇生などの処置をして1名は運転する ・家族が同乗できるから意識有る患者は安心できると思った ・負傷者や病人を安全安楽に移動する方法が工夫されていた ・緊急時でもちゃんとインフォームドコンセントを取りながら勤められている ・患者または家族とインフォームドコンセントをしながら緊急処置をしている ・対象者の恐怖・不安になら無いような迅速な処置と対応の仕方をしている
<p>搬送器具・搬送方法の特異性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・場所や傷病者など目的に応じた特殊なストレッチャーがあつた ・ストレッチャーは車椅子としても使えるものがある ・4段階ギャジアップや取り外し簡単に対象者に対応した使い方ができるストレッチャー ・金属ストレッチャーは移動時の痛み軽減や副木の代用ができる ・いろいろな担架を見せてもらった(二つに折れる, 椅子の形に折れる, エレベーターに乗れる) ・車内の揺れを空気調節によって吸収したりする機能が有るストレッチャー ・地域的な理由から対応処置の変更として階段, エレベーター内では原則どうりに行かない
<p>救急救命士への認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・何時でも冷静に無駄の無い活動 ・一刻の余裕も許されない大事な任務で有る ・救急救命士の動作が機敏であることに感動した ・救急救命士の方は行動がきばきしていた ・救急隊員の方は思っていた以上に冷静に落ち着いて行動されていたことに驚いた ・説明や準備, 片付けなどできばきと無駄がない動きで着々とされている印象を受けた ・病院に着くまでの間に必要な情報を取る事も大切な仕事だと思った ・役割分担がされていること ・日ごろから訓練や実践をされていることが有るだろうなと思いました ・救急に対する気持ちがいっぱいなのがあるなと思った
<p>救急医療への認識</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・救急車の出勤が多くニーズの高さが分かった ・気道確保は最低限の処置だと感じた ・見学中に救急車出勤の無線が入って出勤したのが一番印象に残っている ・救急隊員の機敏な対応が多くの人を命を救っているのだなと実感することができた ・ショック状態にショックパンツが使用されることが分かった ・ショックパンツにタイマーがある
<p>学習への意欲</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・救命器具の使用法の理解が必要でありしっかり勉強しておく必要がある ・高度な技術や知識や判断がすごく重要だと身近で知れて勉強になった ・この救急処置の後看護に繋がっていくと連携性も感じました ・看護学生として心肺蘇生法くらいはきちんとできるようにマスターしておきたいと思った ・看護記録も出勤記録も記録を残すことの必要が分かった ・看護の視点を持たずに見学した
<p>医療施設との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・無線で病院と連絡したり情報を送ったり車内と病院の距離を少しでも縮めて患者さんの受け渡しをスムーズにしている ・心電図を病院へ送るシステムも分かった ・病院との連絡取り組み方が分かった ・VF波型が確認されたらEKGを転送して医師からの判断指示を仰ぎ除細動を行う ・連携により受け入れ病院の情報把握ができて救命率が高まる ・病院の医師と連絡をとりながら処置を行い間違い無く処置は円滑に進むと思った
<p>車内環境の安全管理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・感染予防の点で救急車内は一回搬送するごとに消毒していることが分かった ・感染予防のためにもしっかり消毒されていた ・清潔にも気を使われていることが分かった ・搬送後はその都度救急車内を消毒する ・車内や物品は使用後や定期的に消毒されており感染や清潔に厳重に注意されていた

カテゴリー	具体的記述例
親密感	<ul style="list-style-type: none"> ・看護婦の仕事と救急救命士はどちらも24時間患者を助けると言うことは同じだ ・看護婦と救急救命士の共通点は命を救う、患者の不安除去の声掛け、優しい対応などである ・仕事の中にその人の人柄や優しさが活かせる職業でも有るんだなと思った ・看護婦でも救急でも異常の早期発見と対処の仕方は一番大切だと思った ・患者さんへの声掛け、技術は確実にできるなど看護にも重なる部分があるのだと分かった ・看護と同じように患者さんのために一番良い方法を即座に行なわれていることが分かった
救急救命士の法的規制	<ul style="list-style-type: none"> ・救急救命士のできる医療行為が何かが分かった ・救急救命士は気管内挿管ができないためラリンジアルマスクで気道確保しているなどできない事への対処方法も考えられていて驚いた ・ショックパンツは救急救命士が装着できるが除去は医師 ・ショックパンツは救急救命士と医師が行うことがきちんと区別されている ・感染症によっては搬送しなくて良い場合があることをはじめて知った
イメージとの隔たり	<ul style="list-style-type: none"> ・想像していたよりも狭く感じた ・意外と狭く感じた ・救急車の中は思っていたより狭くすっきりしていた ・もっと広いのかと思ったけど狭くて動きづらいような気がした

た。表1にカテゴリーの名称とセンテンスの記述件数、()に出現率を示した。表2にカテゴリーと具体的記述内容を示した。以下、記述件数の多いカテゴリーから順に述べる。

【**装備資器材の特異性・利便性**】のカテゴリーは、救急車内の応急処置に対応できる装備資器材の特徴や、限られた空間と資器材を上手く応用して救命処置ができるような機能的・構造的に工夫された利便性に関する記述を示している。救急車内や装備資器材について、「車内は救急救命士が使いやすいように便利に工夫されていた」「蘇生用・外傷用などに分けて整理され救急に対応できるような工夫がされている」「吸引圧が低い救急車内でチューブを曲げたり細くして使用の工夫がされていた」「狭い空間に必要最小限の器機類が上手く収められていた」という、狭い車内での救急救命士の技術や環境の創意・工夫などの細部にわたる観察の記述や、「患者監視装置があって状態を監視続けることができるようになっていた」「ラリンジアルマスクは気管内挿管ができない代わりの気道確保ができる」「すごい設備だと思った」「学校で観るのは違っていた」という、コンパクトなモニター装置や、救急救命士の特定行為の一つとされているラリンジアルマスク（マスクより気道確保が確実で、気管内挿管に比べて口唇や歯牙の損傷や咽頭痛が少ない）による気道確保など、特殊な救命用資器材に関心を示している内容が多かった。

【**装備資器材の種類**】のカテゴリーは、「種々の医療装置が有ることが分かった」「救急車内の構造・患者監視装置・パルスオキシメータ・心電図・自動心マッサージ器・血圧計・除細動器・100ボルトのコンセントなど実際に観て何があるかわかった」「輸液セット」「喉頭鏡」「マギール鉗子」「ショックパンツ」「ラリンジアルマスク」「耐振動型ストレッチャー」という、救急車内の装備資器材への関心や、救急用資器材の名称の記述であった。

【**利用者への安全・安楽の配慮**】のカテゴリーは、救急車内における救急救命士と救急隊員の役割分担について、「必ず3名乗車して二人が蘇生などの処置をして1名は運転する」「家族が同乗できるから意識がある患者は安心できると思った」「足側から搬送し搬送中の落下防止の重要性」「傷病者の恐怖・不安に成らないような迅速な処置と対応の仕方をしている」という、救急救命状況にある傷病者の安全や不安軽減に関する内容が記述されていた。また、「患者または家族とインフォームドコンセントしながら救急処置をしている」「救急車内でインフォームドコンセントを行って入ることを知った」「インフォームドコンセントをしてから気道確保や輸液・徐細動器を使用されていた」という、救急救命士による傷病者やその家族に対するインフォームドコンセントの必要性の理解を示した記述であった。

【**搬送器具・搬送方法の特異性**】のカテゴリーは、救急車内に装備されている搬送器具の用途や使用方法や、デモンストレーションの学習内容に関する記述を示している。「4段ジャッジアップや取り外し簡単で対象者に対応した使い方ができるストレッチャー」「車内の揺れを空気調節によって吸収したりする機能がある耐振動のストレッチャー」「ストレッチャーは車椅子としても使えるものがある」「金属ストレッチャーは移動時の痛み軽減や副木として代用できる」「ストレッチャーを座位型にして搬送する」という、これまでの授業や臨地実習では見たことがないような、いづどんな場所でも救急搬送ができる特性や、救急車内の構造に適合したストレッチャーの特殊性について記述しているものが多く見られた。

【**救急救命士への認識**】のカテゴリーは、「いつでも冷静に無駄のない活動をされていると思った」「救急救命士の動作が機敏であることに感動した」という、救急救命士の無駄のない機敏な行動に関する観察内容と、「迅速且つ適切な対応と他のスタッフとの連携できる

力が必要だと感じた」という、救急場面におけるチームワークの必要性について記述していた。また、活動姿勢や態度について、「救急に対する気持ちがいざという時があるなと思った」「日ごろから訓練や実践をされていることがあるだろうなと思いました」「一刻の余裕も許されない大事な任務である」という救急救命士の役割認識についての記述が見られた。

【救急医療への認識】の категорияーは、演習中に本学からの救急車出動の実際を見学して、「見学中に救急車出動の無線が入って出動したのが一番印象に残っている」「救急車の出動が多くニーズの高さが分かった」という認識や、「救急隊員の機敏な対応が多くの人を命を救っているのだなと実感することができた」「ショック状態にショックパンツが使用される事が分かった」という、救命処置や救急救命器具への関心を示し、「人命救助の最低限必要なものが何かを認識した」という、救急医療に対する認識を示した記述が見られた。

【医療施設との連携】の категорияーは、「心電図を病院へ送るシステムも分かった」「無線で病院と連絡したり情報を送ったり、車内と病院の距離を少しでも縮めて患者さんの受け渡しをスムーズにしている」「V f 波形がでたら E K G を転送して医師の指示を仰いだり除細動を行っている」「受け入れる病院側も情報を把握しやすいので救命率が高まる」という、救急救命士と病院との連携プレーに着目して、救急救命活動における円滑な医療システムと治療効果に言及している記述が見られた。

【車内環境の安全管理】の categoriaーは、救急車内の手洗い装置や、感染予防のための消毒に関する内容が示されていた。「感染予防の点で救急車内は一回搬送するごとに消毒していることが分かった」「車内や物品は使用後や定期的に消毒されており感染や清潔に厳重に注意されていた」という、疾病や事故・災害など様々なあらゆる傷病者の救急救命に対する応急処置や、緊急時の搬送を業務とする上で不可欠な救急車内の安全管理に関する記述であった。

【学習への意欲】の categoriaーは、「救急器具の使用方法的な理解が必要でありしっかり勉強しておく必要がある」「看護学生として心肺蘇生法ぐらいはきちんとできるようにマスターしておきたいと思った」という、今後の学習への意欲を示した記述や、「この救急処置の後看護に繋がっていくと連携性も感じました」「看護記録も出動記録も記録を残すことの必要性が分かった」という、施設外看護から施設内看護への関連や、記録の必要性についての記述が見られた。反面、「看護の視点を持たずに見学した」の記述にみられるような学習態度の記述が見られた。

【親密感】の categoriaーは、「看護婦の仕事と救急救命士とはどちらも24時間患者を助けるということは同

じだ」という職業の特性や、「看護婦でも救急でも異常の早期発見と対処の仕方は一番大切だと思った」「看護と同じように患者さんのために一番良い方法を即座に行なわれていることが分かった」という、救急救命士の業務内容に関心を示し、共通点を見出していることが示された内容であった。そして、「仕事の中にその人の人柄ややさしさが活かせる職業でもあるんだなと思った」と、職業に対する親しみを感じた記述が見られた。

【救急救命士の法的規制】の categoriaーは、「ショックパンツは救急救命士が装着できるが除去するのは医師」「救急救命士は気管内挿管ができないためラリンジアルマスクで気道確保しているなど、できないことへの対処法も考えられていて驚いた」「救急救命士のできる医療行為が何か分かった」「感染症によっては搬送しなくても良い場合があることを初めて知った」という、救急救命士の医療行為における法的規制に関心を示した内容が記述されていた。

【イメージとの隔たり】の categoriaーは、「想像していたよりも狭く感じた」「もっと広いのかと思ったけど狭くて動きづらいうような気がした」という、見学乗車前の救急車のイメージと実際が感覚的に隔たっていたことを記述していた。

考 察

1. 学習の深さ

今回の演習では救急車内に装備された救急用資器材や情報通信装置などの特異性と、救急救命士による応急処置の実際について理解できる授業内容を計画し実施した。

学習内容として抽出された【装備資器材の特異性・利便性】【搬送器具・搬送方法の特異性】の categoriaーに示されたように、蘇生用、外傷用などに分けて整理された救急器材などが使いやすく、しかも緊急に備えて手早く機器の用意ができるような車内の限られた狭い空間を調整した資器材の装備や応急処置の工夫や、医療機関との情報通信装置など、救急用装備資器材の特異性や利便性などに着目している。また、救急車内の耐震動型ストレッチャーや、傷病者に応じて段階的に切り替え可能なストレッチャー兼担架を用いた搬送方法や、救急車内の感染予防対策と救命救急場面におけるインフォームドコンセントの必要性など、救急医療における看護の学習を深めている。そして、足側からの搬送や搬送中の落下防止など、傷病者や病人の安全安楽な移動方法について既習の学習内容と対応させて学んでいる。

また、救急車内の情報通信装置を駆使して、傷病者の病態を医療機関へ転送し、医師の指示に従って応急

処置ができることが救命率を高め、受け入れ病院と情報交換をすることなど、傷病者の搬入とスムーズな受け入れの関連について気づいている。そして、救命率と救急隊員の機敏で冷静な行動と、それを可能にしている救急救命士の専門職としての普通の訓練や努力の重要性に着目している。これは、看護の専門職の態度に共通するものとして、今後学生の学習意欲や態度面における教育的な関わりに活用できるものと考えられる。

さらに、学習を深めた要素は、演習中の消防署内通信指令台の通信班から救急隊へ2度の無線連絡が入り、2回目は救急隊員が機敏な行動で瞬時に出動する場面を見学する貴重な体験学習ができたことである。これは、学生が地域の救急医療ニーズの高さを実感し、加えて、搬送後の演習が継続できたことから、看護を学習する学生として、演習に対して緊張して取り組む態度を学習する機会になったことを示唆している。

実習教育において、教師が学生に経験の場を提供することについて、学生が関心を開き、活動をし、思考を巡らす場としての学習環境を準備する役割をもつといわれている²⁾ように、救急車見学乗車を中心とした演習に関心を開いて思考をめぐらし学習を深めていると考える。

他方、喉頭鏡、蘇生セット、輸液セットなどの器材の種類や、救急車内を狭く感じたという感想的なイメージの浅い学習内容と考えられる記述が見られた。

経験型実習教育を提唱している安酸は、「さまざまな経験をどのように意味づけしていくかが、その学生の成長に非常に大きくかかわっているように思う」として、「学生が教材に意味づけしていく教育内容を獲得していく思考過程を援助していくためには教師にはさらに高度な実践的力が求められる」ことや、「直接的経験ができる学習環境の調整や反省的経験をとともにできる教師の教授活動が必要になる」と提言している³⁾。

演習の学習内容を深めるために、記述された内容を教材として次の授業で確認したり、フィードバックして、学習課題の発展に繋がる思考過程の援助をしていくことが必要である。今回は2回目の演習で、本学所在地域の救急医療体制や救急救命士の活動の実際や、救急隊員と救急救命士の資格を有する救急隊員では応急処置行為の違いがあることや、消防本部の通信指令台や出動指令の実際場面について、現場の実態をVTRで学習する授業の中で質問や発問で学習を深めることで、1回目の学習の補完をすることができた。今後は、グループ討議などの授業形態や、教授活動の開発や工夫を重ねていくと同時に、深い学習レベルの教育効果が得られるように、教師の実践的力を高める努力が必要であると考えられる。

2. 学習の動機づけ

学習意欲は独自に存在するのではなく、学習活動に直接影響されるのであって、学習意欲がないということは、適切な学習活動が行われていないといわれている⁴⁾。そして、学習意欲を心理学的に解明された内発的動機づけは、知的好奇心や向上心であり、報酬によって強化されることで行動様式を獲得することと対比されている⁵⁾。

学習への意欲のカテゴリーでは、看護学生として「救急蘇生法ぐらいはマスターしておきたい」「しっかり勉強しておく必要がある」という記述が見られた。これは学生が大学が所在する地域消防署の救急隊の協力による演習という学習活動に影響され、プレホスピタルケアにおける救急救命には心配蘇生法の技術が不可欠であることや、救急器具の使用方法を理解することの必要性を認識し、学習意欲が高められたことによるものと推測する。そして、演習内容を反省的に思考した結果、救急隊による応急処置の後は看護に繋がっていくという、救急隊によるプレホスピタルケアと看護の連携について学習する機会になったことを示唆している。つまり、演習の学習活動によって救急看護の基礎的知識や技術に関する知的好奇心や向上心が、学習への動機づけになったと考える。

加えて、【親密感】のカテゴリーに記述されたような、救急車の出動記録と看護記録の必要性や、24時間体制の職業として異常の早期発見や緊急性が重要性である側面など、救急救命士の業務内容と看護業務の共通点があって、救急救命士の専門職業人としての人柄や優しさなどに対する親密感が強みとなって、学生の学習意欲を高め学習に動機づけている。

早野らは、救急車同乗実習の試みの研究成果から「ケアが引き継がれることの必要性」や、「他職種との協力が重要である」との意味づけが成されたことを報告している⁶⁾ように、実際に稼働している救急車に同乗できる実習が可能であれば、学習の動機づけやプレホスピタルケアの学習としてより効果的である。

また、坂本は、「教師の非言語的接近性の高さが授業テーマ、学生の元来の学習意欲とともに授業に対する動機づけに関与することが明らかになった」と報告している⁷⁾。

選択科目のような専門性を深める学習は、教師が学習場面の中心になるような授業ではなくて、救急車見学乗車の演習に見られるように、学生が主体的な学習が経験できる場として、授業形態と学習の動機づけについて今後検討を重ねる必要があると考える。

結 論

初めての試みとして、救急車見学乗車と救急救命士によるデモンストレーションの演習をしたことの学習効果を検討するために、学生の演習後レポートを分析した結果、【装備資器材の特異性・利便性】【装備資器材の種類】【利用者への安全・安楽の配慮】【搬送器具・搬送方法の特異性】【救急救命士への認識】【救急医療への認識】【学習への意欲】【医療施設との連携】【車内環境の安全管理】【親密感】【救急救命士の法的規制】【イメージとの隔たり】の12個のカテゴリーが抽出された。本演習の成果としてプレホスピタルケアにおける救急救命活動の実際と救急看護の認識を深め、学習の動機づけになったことが伺えた。

文 献

- 1) 石野レイ子, 二重作清子. 大学生の自己評価と授業評価に関する認識の分析. 広島県立保健福祉短期大学紀要, 5:1-10, 2000
- 2) 中津川順子. デューイの経験論と実習教育. Quality Nursing, 5:13-18, 2000
- 3) 安酸史子. 経験型実習教育の考え方. Quality Nursing, 5:4-12, 2000
- 4) 杉森みど里. 看護教育学. 医学書院. 152, 1995
- 5) 平凡社. 新版心理学辞典. 647-648, 1981
- 6) 早野智子, 大谷則子. 救急車同乗の試み—他職種の活動への参加がもたらす学生の学び—. 日本看護学教育学会誌. 215, 2000
- 7) 坂本正裕, チャールズ・プリブル, ジェームズ・キートン. 大学生の授業への動機づけと学習達成度に対する教員の非言語的接近性の役割. 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 200, 1999

A discussion of student learning in an ambulance ride - Based on the content analysis of nursing students' reports -

Reiko ISHINO*¹ Kiyoko FUTAESAKU*²

*1 Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health Sciences

*2 Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

As a part of their studies, we gave our students an opportunity to deepen their understanding about the significance for nursing of First Aid Medication. The students rode in an ambulance and observed a demonstration by paramedics. 38 students submitted reports after the above study.

We analyzed their awareness of the significance and the actual process of the First Aid Medication carried out in the ambulance. We classified their understandings in the following categories; "Characteristics and Convenience of Built-in Devices", "Kinds of Built-in Devices", "Safety & Comfort Conditions For Patients and Other Riders", "Characteristics of Transporting Facility & Method", "Understanding About Paramedics", "Increased awareness of First Aid Medication", "Motivation for Nursing Study", "Closeness of Cooperation with Hospitals", "Safety Management of In-Ambulance Circumstances", "Feeling of Closeness Between Paramedics and Nurses", "Paramedic Regulations", and "Differences Between Their Previous Ideas and the Actual Process of In-Ambulance First Aid".

Judging from their reports, the students were able to observe and the actual situation and process of First Aid Medical Activity which was performed until the patient arrived at hospital. Furthermore, this opportunity motivated them to study more about First Aid Medication and Nursing.

Key words : nursing education, emergency nursing, first aid medication, ride in ambulance, paramedic